



100km以上続くデナリ国立公園の未舗装路



広い空だ。旅の間はこれだけがあればいい

アラスカ、夏の旅

深い森を裂き、地平線に吸い込まれるように延びる一本道を、私はゆつくりと走っていく。

文・写真・和田義孝
Text & Photo by Yoshitomo WADA



何もないのがいい

アンカレジのキャンプ場で受付の女性に私に言った。「トラックベアが出るので、テントの中には食料を入れておかないようにしてください。」

アンカレジはアラスカ最大の都市で、州の人口の4割以上にあたる約27万8000人が住んでいる。町の中心部には高層ビルが建ち、東京ドームがふたつも3つも入りそうな広大なショッピングモールが点在していたりもするのだが、郊外に広がる森はクマが暮ら

るほど豊かなのである。ある日の新聞の市民マラソンレポートには、「中継地点を真つ先に通過していったのはクマの子ガマを連れた母ガマです」というキャプションとともに、「トップのランナーの面でコースを横切るクマの親子の写直が載っていた。また、人の暗騒と賑わいの絶えないダウンタウンから1kmと離れたくない場所には、シツプクリクという幅20mほどの川が流れているのだけれども、この小川にも都市に飲み込まれることのない豊饒な自然の生態を見ることのできる。5月から9月にかけて無数のキングサーモン、レッドディーモン、シルヴァーサーモンといった50cmにも1mにもなる大きな魚が背びれを震わせ、すぐそこに広がる河口から龐大な群れで上ってくるのである。

アラスカとはそんなところである。都市であつても、人間に犯されることのない自然が十二分にあるのだ。だから、町を二歩出てしまえば、それはもう無限とも思える森が広がり、大小幾筋もの川が流れ、荒々しい山塊が聳えるだけとなる。そして、動物たちはその原野で整々と生きているのである。置はただ一本が細い線に在りて、その荒野を太平洋から北極海まで延びている。その間、食料も、水も、クルマにたつてはガリリンも、必要最低限なだけしかない。余計なものは一切ない。日本の都会の忙殺、疲弊、混沌、糞糞、泥濘、混乱、狂乱……。そんなものから私は逃げてきたのだ。アラスカ

の「何もない」というのがいいではないか。しばらく私は自由である。自分のペースで走り、見て、聞いて、食べて、寝る。

さあ、出発だ。Here we go!

野性に対する緊張感

7月のアラスカは、とくに山に囲まれたアンカレジや、デナリ国立公園のあるアラスカ山脈一帯は不安定な天候の日が多い。私がアラスカにいた約1カ月間、すつかりと晴れた日は3日しかなかった。いつも空は低くて、重そうな鉛色の雲が頭上に垂れ込め、ときおり雨を降らせた。旅の間は、ただ開放的な気分で晴れ晴れとしていたのに、空があまりに陰鬱なものだから、そんな気持ちばかりにもなれなかった。

日本からアンカレジに着いて3日目。出発。と決めたその日も朝から冷たい雨だった。気温5度。日本の真冬のよくな寒さだ。天気予報は1週間先まで同じような空模様を示していた。仕方



上/フェアバンクスのアウトドアショップ。とてつもなくデカイ。中/そこで販売されていた熊除けのスプレー。下/アンカレジの自転車ショップ。米国製MTBの取り扱いが多い

がない。レインウェアを着て、濡れたテントをそのままたたむ。そして、出発の高揚感もいままに、氷雨のなか、旅の行程は、まず、アンカレジからアラスカ山脈の谷を縫う3号線を北上。デナリ国立公園に立ち寄り、フェアバンクスタウンまで行く。距離は約600km。それから、折り返してアンカレジに戻るが、4号線、1号線とつなぎ、往路とは別のルートをとる予定だ。これが約700km。合計約1300km、1日100km走り、ところどころでの滞在を考慮して20日後の行程だ。町を出れば荒野が広がるアラスカだが、それでもここはアメリカ。路上にいますから、100km内には必ずロードハウス（ガリリンスタンド）があるので、食料や水の補給に困ることはない。それで、自転車は軽いほうが軽快に走れるのだから、それらはその時々で必要なだけ持てばいい。いざというときの非常食以外の食料1日分と水2